

教材開発例 1 「わたしが行かねば」

〔小学校中学年 主題：強い意志 内容項目：1の(2)〕



藤野昌言ふじのしょうげんさんは、府中市の医師である。明治12年（1897年）に全国的に流行したコレラの治療に自身の危険も顧みず邁進し、身を捧げた。

地域の人々は、その死を悼み、現在、古香堂と呼ばれている祠堂を建て、感謝の意を表した。現在も、命日には、遺徳を偲ぶ昌言祭が行われている。



(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

府中市は、府中味噌や府中ダンスなど古くから伝わるものづくりの伝統ある地域である。素材の収集にあたっては、まず、小学校中学年用の社会科副読本から地域の特色ある伝統や文化、自然、地域に貢献した人物を調べた。また、所属校内や市道徳推進協議会において、素材収集の依頼をした結果、多くの素材を集めることができた。

先人の伝記分野においては、その人物が府中市の地域の人々のために行った功績がはっきりしているか、現在の生活につながりがあるか、その人物の生き様から生きる勇気や知恵を感じることが出来るかという視点で絞っていった。とりわけ、「藤野昌言」は、医者として当時わかっていなかった「コレラ」の治療に尽くした歴史的な史実がはっきりしていること、また、現在も「昌言祭」という慰霊祭が行われていることなど、医者として治療をしたというだけでなく、貧しい患者からは治療費をとらない代わりに味噌や米をあげたり、葬式の世話をしたり、慕ってくる若者を自分の家に住まわせて学問を教えたりするなど、より人間らしさが感じられた。中学年の社会科副読本にも「地域に貢献した人々」として取り上げられており、各教科等との関連も図りながら学習することも出来ることから、「藤野昌言」を素材として選定した。

(2) 情報の収集



探してみよう

○ 郷土資料（社会科副読本等）

まず、社会科副読本の作成者へ資料・情報提供のお願いをして資料を集めた。また、副読本作成のために使われていた参考文献を図書館で調べた。『府中人物伝』や遺族の方が書かれた『医師藤野昌言』、『もとやま2, 4号』などの資料から、藤野昌言の生い立ちや家系、医者としての患者への対応、また多くの学者たちと熱心に漢学の勉強をしたことなどの情報を収集した。

○ 地域の関係者（遺族・郷土史研究者へのインタビュー）

府中市教育委員会の協力を得て遺族の方へ連絡をとり道徳資料作成の承諾を得た。快く承諾していただいたが、昌言先生の功績のみが後世に残ってクローズアップされているが、当時同じ考えをもって同じように患者へ治療をしていた医者もいるので、昌言先生だけを取り上げられることには抵抗を感じるという遺族の方の願いも知ることが出来た。

府中市教育委員会の方と共に「昌言祭」へ参加し、慰霊祭の後の直らいの席で遺族の方、郷土史研究者の方の話聞くことが出来た。



○ 情報通信ネットワーク（新聞記事）

新聞（昭和34年、31年、52年等）には、「古香堂」の所以、慰霊祭の続けられている様子などの記事が掲載されていた。また、藤野昌言の功績だけでなく、当時の社会情勢や風潮などを調べるために、新聞記者の方に依頼して当時の新聞記事を収集したところ、当時（明治）出版された新聞では流行が激しかったコレラを恐れて人々が「コロリ」と呼んでいたことなどが分かった。

（3）読み物資料の作成



書いてみよう

① 主題やねらいを決定する。

小学校解説では、強い意志について、「児童が自立し、よりよく生きていくためには、何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。しかし、それは見通しもなく取り組むのではなく、よりよい自己を実現しようとする向上心と結び付いてこそ、前向きな自己の生き方が自覚されてくるといえよう。そのためにも、児童がより高い目標を立てたり、自分としての夢や希望を掲げたりして、その達成や実現への志をもち、勇気をもって取り組むことができるようにすることが重要になる。」とある。

また、中学年の段階においては、「自分がやらなければならないことだけではなく、更に自主性を発揮し、自分でやろうと決めたことに対しても積極的に取り組み、粘り強くやり遂げる精神を育てることが大切になる。そのためには、あきらめずに取り組むことに意義や、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていくことが求められる」とある。また、「心のノート」の関係ページには、キーワードとして「『今よりよくなりたい』という心をもとう」と示されている。

これらを確認し、「藤野昌言」を素材として、資料を作成するに当たっては、強い意志にねらいを焦点化し、昌言がやろうと決めたことは何なのか、また、決めたことに対して、積極的に取り組み、粘り強くやり遂げた姿を描くことが大切であると考えた。

② 対象となる学年の発達段階や特性を把握する

中学年は、郷土（地域）のとらえが、自校の学校区から住んでいる市町の範囲にまで広がる段階である。また、「藤野昌言」については、社会科副読本でも取り上げられており、すべての児童が、名前は知っているが、具体的に地域の発展にどう貢献したのかまでは十分理解していない。また、石碑の存在や地域で行われている昌言祭に参加した体験がある児童はいなかった。

③ 登場人物や状況を設定する

〔具体的な場面設定と登場人物〕

○主人公 藤野昌言

- ・ 医者之家に生まれ、小さいときから人々を助ける父を見て育った。
- ・ どんな人に対しても、どんな病気に対しても人を助けようと忙しく往診に出かける。
- ・ お金が払えない患者には、味噌や米を置いて帰ることもよくあった。

○補助的な人物 家族

- ・ そばで昌言を見ていたが、疲れ果てた昌言を見かねて、体調が悪い日に往診を断るように進める。
- ・ 昌言の体のことが心配でたまらない。

○その他 近所の老人

- ・ 孫とおばあさんが急病にかかり、慌てて昌言のところへ駆け込み、往診をお願いする。
- ・ 昌言先生なら助けてくれると信じている。



④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する。

史実に基づいて経歴を整理した。そして、昌言の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

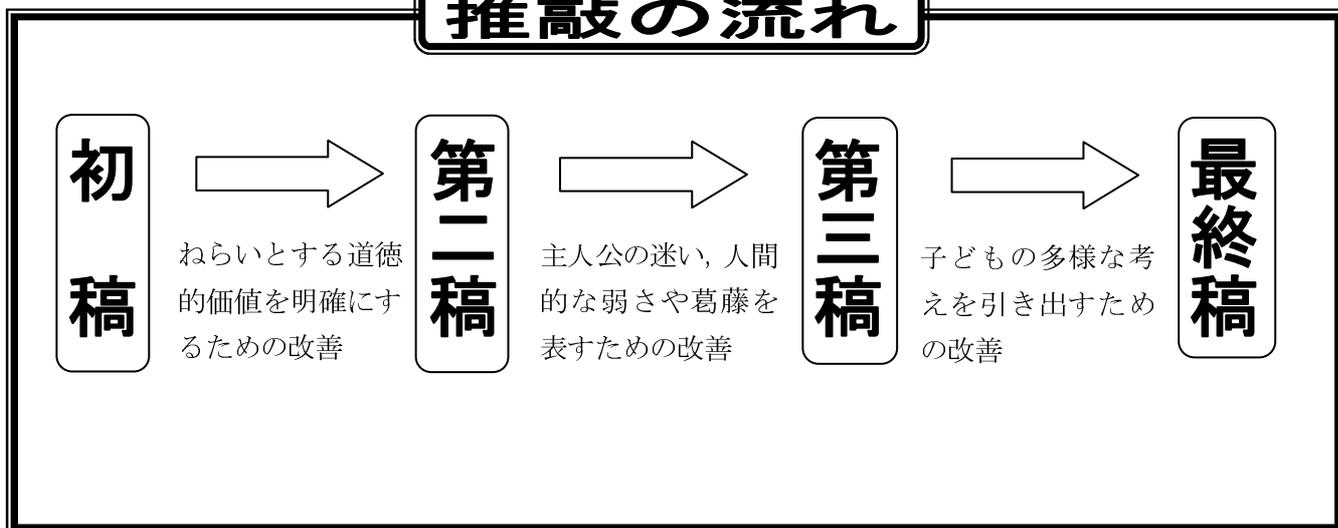
	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	毎年10月6日に、藤野昌言さんの遺徳を偲ぶ「昌言祭」が、藤野家の子孫や関係者が集まり行われている。	昌言は、父親の死をきっかけに昌言が医者として生きていくことが、自分の目標であると心に決めた。また、医者になってからも患者に味噌や米を置いて帰ったり、熱心に勉学に励んだりした。	全国的にコレラが流行。多くの死者が出るが、原因も治療法もわからない。こういった状況の中で、医者として府中の人々の命を救うため研究を続けながら誠実に治療に当たった。体調を崩した日も、要請に応え、患者の往診し、自らコレラに感染し命を亡くしてしまう。	地元の多くの人たちによって感謝の気持ちを込めた石碑が建てられた。 この慰霊祭を「昌言祭」と呼び百二十年以上経った今も続いている。

4コマ場面絵

⑤ 場面分けをもとに文章化する

⑥ 不要な文章や文言を削除する

推敲の流れ



初稿

命がけの治療

府中市の府中公園の中にある「古香堂」で10月6日、たくさんの人が集まって慰霊祭を行っています。それには、こんないわれがあります。

今から170年ほど前のことです。



府中市朝日町というところに藤野昌言という医者がありました。

昌言は、1832年、府中市に生まれ、10代から大阪に出て医者になるための勉強をしていました。19歳のある日、医者である父親の危篤の知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし、当時のことです。府中に帰った時、お父さんはもう亡くなっていました。

昌言は、お父さんの後を継いで、ここ府中で医者になりました。昌言は、医者になってからも熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と評判が立ち、患者が次々とやってくるようになりました。昌言は、家で診察するだけでなく、頼まれれば往診に出かけました。貧しい家の患者からは治療費を取らず、

「これも薬のうち」

と、米や味噌を置いて帰ることもあり、そのかいあってたくさんの方が元気になりました。

1879年、昌言が47歳の年、中国大陸から九州に入ったコレラが全国的に流行しました。

コレラは、急に吐いたり下痢をしたりする伝染病で、当時は原因が分からなかったため、十分な治療もできず、とても恐れられていました。民家や道路から120メートルも離して小屋を立て、その小屋に入りきれないほどの患者を押し込み、元気な人たちから隔離しました。小屋の中から水を求めて道に這い出したまま、死ぬ者もいました。ここ府中でも、亡くなった人は1000人～2000人とも言われています。

周りの医者は、お金持ちの人からの往診さえ断るようなありさまでした。しかし昌言は、

「黙って見過ごすわけにはいかない。」

と言って、昼も夜も関係なく、食べることも寝ることも忘れるほど府中・芦品地方を駆けまわり治療をつづけました。

昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、身体を洗ってから家に上がりました。時には、患者の吐いたものや排泄物で汚れることもあったからです。

こんな日々が2か月ぐらい続いた頃のことです。その日も昌言は、朝早くから患者の治療でおおいそがしでした。しかし昌言は、いつもより体の調子がすぐれませんでした。

元気旺盛な昌言も今日に限って、

「まあ一服、ひとやすみだ。」

といて縁側に座って雲をながめていました。

ちょうどその時、一人の老人が訪れました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で難儀いたしております。どうか御診察をお願いします。」

と、玄関先の土間に腰をかがめてたのみ

「お願いでございます。二人の生命をお助けくださいますように。」

と、さらに手をついてたのみました。これからひとやすみと考えていた昌言でしたが、

「よし、往診いたしましょう。」

と答えました。いつになく力の無い声でした。診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほっておいては大変なことになる。」

と言って、治療を始めました。治療を終えた昌言は、

「よかった、よかった、これで助かりますぞ。」

と、言ったかと思うと、その場に倒れ、近所の人々が昌言を自宅へ送りました。恐れられていたとおり、昌言もコレラに感染していたのです。病の床についても昌言は、高熱で苦しむ患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜更けに亡くなってしまいました。

四八歳、10月6日の出来事でした。

コッホによってコレラ菌が発見されたのは、昌言が亡くなって4年後のことでした。



第2稿

ねらいとする道徳的価値を明確にするための改善

第2稿	改善点及びその理由
<p style="text-align: center;">命がけの治療</p> <p>府中市の府中公園の中にある「古香堂」で10月6日、たくさんの人が集まって慰霊祭を行っています。それには、こんないわれがあります。</p> <p>今から170年ほど前のことです。</p> <p>現府中市朝日町というところに藤野昌言という医者がありました。</p> <p>昌言は、1832年、府中に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。19歳のある日、「父危篤」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし何日もかかって府中に帰り着いた時には、お父さんはもう亡くなっていました。</p> <p>昌言は、<u>迷わず</u> ア お父さんの後を継いで、ここ府中で医者になりました。医者になってからも昌言は、熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになり、患者が次々とやってくるようになりました。昌言は、家での診察はもちろん、往診にも出かけ、治療費が払えない家の患者には、ア 「これも薬のうち」と、<u>米や味噌を置いて帰ることもありました。</u> ア</p> <p>1879年、昌言が47歳の夏、<u>恐怖の伝染病</u> イ 「コレラ」が全国的に流行しました。コレラは、急に吐いたり下痢をしたりする病気で、<u>ここ府中地方一帯にもみるみる内に広がり次々とコレラに感染しました。</u> イ</p> <p>原因が分からない病気だったので、十分な治療ができず、<u>コロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ、」と呼んでいました。</u> イ 1000人も2000人も次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、<u>あせりとともに毎晩医学の本を読んでは、薬の調合を繰り返しました。</u> ウ</p> <p>村役場は、患者を隔離して治療するため、<u>家や道路から遠く離れた畑の中に小屋を建てました。その小屋には、患者が日に日に増え、入りきれないほどになってしまいました。</u> イ</p> <p>小屋の中から水を求めて道に這い出したまま、<u>死んでいく病人を目の当たりにして、昌言は、立ちすくみました。</u> エ</p> <p>周りの医者たちは、<u>どんなにお金を積んで頼まれても往診を断るようなありさ</u></p>	<p>ア</p> <p>構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述によく具象性を与えているか」</p> <p>本人の意思の強さを表現するため「迷わず」という表現を加えた。</p> <p>昌言自らが、診察、往診を進んで行っていたことをはっきりさせるため「たのまれれば」を削除し、「診察はもちろん」という表現に変更した。</p> <p>「そのかいあってたくさんの人が元気になりました。」は削除した。</p> <p>イ</p> <p>構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」</p> <p>コレラが流行した時期を具体化するとともに、「当時」という表現を削除した。</p> <p>伝せん病であるコレラが、中国大陸から伝わってきたことなどは、コレラの恐ろしさとは直接、関係がないため削除した。</p> <p>逆に、感染の恐ろしさと当時の、地域住民が混乱していた状況を詳しくする文章を加えた。</p> <p>ウ</p> <p>構成チェック票（例）項目⑤ 「適切な状況を設定しているか」</p> <p>昌言が、自分の目指す医者になるために日々努力を続けた姿を表す文章を加えた。</p> <p>エ</p> <p>構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述によく具象性を与えているか」</p> <p>人間として「恐怖」を感じながらも「人々を救いたい」という思いをより強く表す記述を加えた。また、詳しい説明は削除した。</p>



までした。**イ** 昌言は、いてもたってもおられず、**オ** 昼も夜も関係なく、
 食べることも寝ることも忘れるほど府中や芦品地方を駆けまわり治療をつづけま
 した。

昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に **オ** 身体をふい
 てから家に上がりました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。そんなある
日、昌言は、診察時間も近づき、今日も朝早くから患者が来るだろうと気になり
ながらもどうしても体がだるく、診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌
 言を見るに見かねた家族から、

「今日は一日どうぞお休みなってください。」

とたのまれました。**カ** ちょうどその時、一人の老人が訪れました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で難儀いたしております。もしや、コロリに
 かつたのでは・・・どうか御診察をお願いします。」

と、玄関先の土間に腰をかがめてたのみ

「お願いでございます。二人の生命をお助けくださいますように。」

と、さらに手をついてたのみました。昌言は、しばらくだまっただま考えていま
 したが、重い体で立ち上がり、いつになく力のない声で、**キ**

「よし、往診いたしましょう。」

と答えました。診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほっておいては大変なことになる。」

と言い、治療を始めました。

「よかった、よかった、これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

家族から、何度も何度もお礼を言われました。

その途端、昌言はその場に倒れてしまいました。恐れていたとおり、昌言もコ
 レラに感染していたのです。高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配しコレラ
の治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜更け、ついに命が切れてしま
いました。**ク**

昌言48歳、10月6日の出来事でした。

コッホによってコレラの原因がコレラ菌であると発見されたのは、昌言が亡く
 なって4年後のことでした。

昌言の死後、地元の人たちはその死を惜しみ石碑を建てました。この慰霊祭を
 地元の人たちは、「昌言祭」と呼び、今もなお120年以上も続いています。**ケ**

オ

構成チェック票（例）項目⑤
 「適切な状況を設定しているか」

往診に走り回った昌言の気持
 ちは、児童に考えさせたいと考
 え、気持ちを直接、表現した部分
 を削除した。

また、昌言が自分への感染と家
 族への感染を恐れた思いを表現
 するために、「丁寧に」という言
 葉を加えた。

カ

構成チェック票（例）項目④
 「登場人物のやりとりに無理は
 ないか」

時間経過を季節の移り変わり
 で表現した。また、長期間、治療
 を続け、疲労がたまってきている
 記述を加え、体調が悪いという状
 況を詳しくした。

さらに、昌言の体を心配する家
 族の思いを加えた。

キ

構成チェック票（例）項目⑦
 「叙述によく具象性を与えてい
 るか」

元気なときは違う心の葛藤
 を表現し、往診することを決心す
 るまでの昌言の気持ちを考えさ
 せるため、「しばらく黙って考え
 る」場面を設定した。

ク

構成チェック票（例）項目③
 「子どもの発達段階に対応した
 構造と内容をもつものであるか」

最期まで、自らの病気よりも、
 患者への治療を考え続けた昌言
 の思いが、中学年の児童に分かり
 やすくなるよう表現を変更した。

ケ

構成チェック票（例）項目①
 「子どもの興味・関心に沿ったも
 のであるか」

地域に建立されている石碑や
 毎年行われている慰霊祭（昌言
 祭）について表現し、自分たちの
 生活とのつながりをもたせるよ
 うにした。



第3稿

主人公の迷い、人間的な弱さや葛藤を表すための改善

第3稿	改善点及び理由
<p style="text-align: center;">わたしが行かねば コ</p> <p>府中市の府中公園にある「古香堂」では、毎年10月6日に、<u>たくさんの人が集まります。</u> サ</p> <p>今から170年ほど前のことです。</p> <p>現在の府中市朝日町に藤野昌言という医者がありました。</p> <p>昌言は、1832年、医者の子に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。</p> <p>19歳のある日、「父危篤」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし、7日目に府中に着いた時には、お父さんはもう亡くなっていました。<u>父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「<u>医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。</u>」が、忘れられませんでした。</u> シ</p> <p>昌言は、迷わずお父さんの後を継いで、ここ府中で医者になりました。</p> <p>医者になってからも昌言は、<u>府中市の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。</u> シ やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになりました。昌言は、家での診察だけではなく、往診にも出かけました。そして、治療費が払えない患者には、</p> <p>「これも薬のうち」と、米やみそを置いて帰ることもありました。</p> <p>1879年夏、<u>伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急に吐いたり下痢をしたりする病気で、当時は原因が分からなかった</u>ので、十分な治療ができませんでした。<u>うつった人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、</u> ス 昌言は、あせりとともに毎晩医学の本を読んでは、薬の調合をくり返しました。</p> <p><u>どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、</u> セ 昌言はいてもたってもおられず、昼も夜も関係なく、食べることも寝ることも忘れるほどかけまわり治療をつづけました。</p> <p>昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてから家に入りました。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p style="text-align: center;">コ</p> <p>構成チェック票（例）項目⑤ 「適切な状況を設定しているか」</p> <p>「命がけの治療」では、生命尊重を思わせる。強い意志をより明確化するために題を「わたしが行かねば」に変更した。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p style="text-align: center;">サ</p> <p>構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に応じた構造と内容をもつものであるか」</p> <p>中学年の児童にとって「慰霊祭」という表現は、理解が難しい。また、この場面では、「慰霊祭」を理解する必要がないと考え「慰霊祭をおこなっています」を削除した。</p> <p>また、「それにはこんないわれがあります」の部分も資料内容の把握には必要がないと考え、削除した。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p style="text-align: center;">シ</p> <p>構成チェック票（例）項目⑤ 「適切な状況を設定しているか」</p> <p>主題を強い意志としているが、資料の中に昌言が目指した医者としての「目標」が明確でなかった。そこで、「目標」が明確になるよう、どんな医者になろうとしたのか、父の遺した言葉等を加えた。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">ス</p> <p>構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に応じた構造と内容をもつものであるか」</p> <p>中学年の児童がより状況を把握しやすくなるよう変更した。コレラという病気の詳しい説明や隔離の経過、死者の人数は、ねらいとのかかわりで特に記述する必要がないと考え、削除した。</p> </div>



こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも体がだるく、どうしても診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人の老人が駆け込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロナにかかったのでは・・・お願いでございます。二人の生命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついてたのみました。昌言は、しばらくだまったまま考えていましたが、ふらつく足で立ち上がりました。それを見た家族が、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、止めるのも聞かず昌言は、はっきりと

「往診いたしましょう。」

とこたえました。家族は、

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

涙ながらに押しとどめました。 ソ

「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、強くうなずいて往診に出かけました。 タ

診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」

と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

家族から、何度も何度もお礼を言われました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。昌言もコレラに感染していたのです。高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜更け、ついに息を引き取りました。 チ

昌言47歳。10月6日の出来事でした。

ツ

削除した部分

彼に命を助けてもらった チ 地元の人たちは、感謝の気持ちを込め石碑を建てました。このお祭りを「昌言祭」と呼び、120年以上経った今も続いています。

セ

構成チェック票（例）項目④
「登場人物の取り合わせややりとりは無理がないか」

往診に出かけた医者は、昌言ただ一人ではなかったという史実に基づき、表現を変更した。

ソ

構成チェック票（例）項目⑤
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

昌言が、自分の体調だけではなく、家族の思いも含めた迷いやそれでも医者としての志を貫く強い意志を強調するために、家族が反対する会話文を加えたり、決意した言葉を発する前の行を空けたりする工夫を行った。

タ

構成チェック票（例）項目⑦
「叙述によく具象性を与えているか」

昌言の強い意志が込められた決意を表すために、「いいや、私が行かねば・・・」という表現に変更した。また、「強くうなずいて」という表現を加えた。

チ

構成チェック票（例）項目⑦
「子どもの発達段階に応じた構造と内容をもつものであるか」

中学年児童により分かりやすくなるよう、具体性ある表現に変更した。

ツ

構成チェック票（例）項目③
「子どもの発達段階に応じた構造と内容をもつものであるか」

コレラ菌の発見は、ねらいとのかかわりで特に記述する必要がないと考え、削除した。



最終稿

子どもの多様な考えを引き出すための改善

最終稿	改善点及び理由
<p style="text-align: center;">わたしが行かねば</p> <p>府中市の府中公園にあるお堂 テ では、毎年10月6日に、たくさんの方が集まります。</p> <p>今から170年ほど前のことです。</p> <p>現在の府中市府中町朝日町に藤野昌言 テ という医者がありました。</p> <p>昌言は、天保13（1832）年、テ 医者之家に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。</p> <p>19歳のある日、「父危篤」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし7日目に府中に着いた時には、お父さんはもう亡くなっていました。</p> <p>父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。昌言は、迷わずお父さんの後をついで、ここ府中で医者になりました。</p> <p>医者になってからも昌言は、府中市の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになりました。昌言は、家での診察だけではなく、往診にも出かけました。そして、治療費が払えない患者には、</p> <p>「これも薬のうち」</p> <p>と、米やみそを置いて帰ることもありました。</p> <p>明治12（1879）年 テ 夏、伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急にはいたり下痢をしたりする病気で、当時は原因が分からなかったため、十分な治療ができませんでした。うつった人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、あせりを感じながらも テ 毎晩毎晩 ト 医学の本を読んでは、薬の調合をくり返しました。</p> <p>どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、昌言はいてもたってもい ナ られず、昼も夜も、食べることも寝ることも忘れて町中を ト かけまわり治療をつづけました。</p> <p>昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてか</p>	<p>テ</p> <p>構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」</p> <p>中学年の児童にとって、「古香堂」という言葉は難しい。また、名称に諸説あるため、「お堂」という言葉に変更した。 藤野昌言の名前が難しいため、ふりがなを加えた。 時代を正確にするために「天保」、「明治」を加えた。 より昌言の思いを分かりやすくするため、「感じながらも」という文章に変更した。</p> <p>ト</p> <p>構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述をよく具象性を与えているか」</p> <p>昌言が、自分が決めたことについて、積極的に取り組もうとしている姿を強調するため、「毎晩」を繰り返したり、「町中」を加えたりした。</p>



ら家に入りました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも、その日は **ナ** 体がだるく、どうしても診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人のおじいさん **ナ** が駆け込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、 कोरोリにかかったのでは・・・お願いでございます。二人の生命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついてたのみました。それを見た家族は、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、止めるのも聞かず昌言は、ふらつく足で立ち上がり、

「往診いたしましょう。」

と、こたえました。

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

家族は涙ながらに押しとどめました。昌言は、しばらくだまっただまま考えていました。 **ニ**

「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、家族をふり向き強くうなずいて往診に出かけました。

しんさつ
診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」 と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

おじいさんは、何度も何度もお礼を言いました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。昌言もコレラに感染していたのです。高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜ふけ、ついに息を引き取りました。

昌言47歳。10月6日の出来事でした。

彼に命を助けてもらった地元の人たちは、感謝の気持ちを込め石碑を建てました。

このお祭りは「昌言祭」と呼ばれ、 **ナ** 120年以上経った今も続いています。

ナ

構成チェック票（例）項目⑥
「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

中学年の児童にとって、より理解しやすくするために、言葉を付け加えたり、言い方を変更したりした。

ニ

構成チェック票（例）項目⑥
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

第3稿にある「しばらくだまっただまま考えました」の記述、「いいや、わたしが行かねば・・・」の前の行を空けたこと、この二つがあることにより、昌言が葛藤する場面が二つに分かれてしまった。そのため、児童がどの部分を考えたらいいのか不明確になった。そこで、前の記述を後の記述の直前に移動させ、昌言が、葛藤する場面を一箇所にまとめて表した。



わたしが行かねば



府中市の府中公園にあるお堂では、毎年10月6日に、たくさんの方が集まります。

今から170年ほど前のことです。

現在の府中市府中町朝日町に藤野昌言ふじのしょうげんという医者がありました。

昌言は、天保13（1832）年、医者てんぼうの家に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。

19歳のある日、「父危篤きとく」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし7日目に府中に着いた時には、お父さんはもう亡くな

っていました。

父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。

昌言は、迷わずお父さんの後をついで、ここ府中で医者になりました。

医者になってからも昌言は、府中市の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになりました。昌言は、家での診察しんさつだけではなく、往診おうしんにも出かけまし

た。そして、治療費ちりょうひが払えない患者には、

「これも薬のうち」

と、米やみそを置いて帰ることもありました。

明治12（1879）年夏、伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急にはいたりげりをしたりする病気で、当時は原因が分からなかったため、十分な治りようができませんでした。うつった人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、あせりを感じながらも、毎晩毎晩医学の本を読んで、薬の調合をくり返しました。

どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、昌言はいてもたってもいられず、昼も夜も、食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療をつづけました。

昌言は、往診おうしんから帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてから家に入りました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、診察時間しんさつも近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも、その日は体がだるく、どうしても診察室しんさつに足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人のおじいさんが駆け込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロリにかかったのでは……。お願いでございます。二人の生命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついたのみました。それを見た家族は、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、止めるのも聞かず昌言は、ふらつく足で立ち上がり、

「往診おうしんいたしましょう。」

と、こたえました。

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

家族は涙ながらに押しとどめました。昌言は、しばらくだまったまま考えていました。



「いや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、家族をふり向き強くうなずいて往診おうしんに出かけました。診察しんさつするなり、「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」
と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

おじいさんは、何度も何度もお礼を言いました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。

昌言もコレラかんせんに感染していたのです。

高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜ふけ、ついに息を引き取りました。

昌言47歳。10月6日の出来事でした。

彼に命を助けてもらった地元の人たちは、感謝せきひの気持ちを込め石碑を建てました。

このお祭りは「昌言祭しょうげんさい」と呼ばれ、120年以上経った今も続いています。



【参考文献】

藤野守一（著）「医師 藤野昌言」

本山町郷土史会（編）（1986）「もとやま2号」「もとやま4号」 本山町 本山町郷土史会

村上正名（著）（1981）「府中散策」 佐々木印刷出版